

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 13 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520386

研究課題名(和文) アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容と価値観の変化についての研究

研究課題名(英文) A study of the acculturation of Japanese poetry in Argentina and its influence on Argentine society

研究代表者

井尻 香代子 (IJIRI, Kayoko)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：70232353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：アルゼンチンにおける日本の詩歌受容の経緯とスペイン語ハイクの制作状況を調査し、日本人移民の文学・芸術活動がアルゼンチン社会に浸透し、アルゼンチン・ハイクという新しい詩的ジャンルを生み出したプロセスを確認した。また、研究期間をとおして収集した文献資料や音声データを分析し、アルゼンチン・ハイクの異文化混濁的特徴を季語、トピック、韻律の側面から明らかにした。最後に、日本の伝統詩が内包する人間と自然に関する価値観の受容をとおしてアルゼンチンにもたらされた文学観や環境思想の変化を検証することができた。

研究成果の概要(英文)：After examining the process of the acculturation of Japanese poetry in Argentina, and the consequent production of Spanish-language haiku, the author discusses how Japanese immigrants' literary and artistic efforts have shaped Argentine society, spawning a new poetic genre dubbed Argentine Haiku. By analyzing written documents and audio data, the researcher describes the hybrid nature of Spanish-language haiku, focusing on specific seasonal words, topics, and metrics. Finally, the author calls attention to humanitarian and natural themes typically explored in traditional Japanese poetry, and their influence on Argentine society's perception of literature and the environment.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：比較文学 日本の詩歌 アルゼンチン・ハイク 季語 韻律 スペイン詩法 自然観の変化 エコロジ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) アルゼンチンでは、「日亜文化学院」(1954年設立)、「西部俳句グループ」(1986年発足)、「ホルヘ・ルイス・ボルヘス国際財団」(1988年設立)、「東西学院」(1992年設立)によって日本の詩歌の受容とスペイン語ハイク、タンカ、センリュウの生成が促進された。この4つの機関はいずれも日本人移民の文化普及活動と現地作家・教員の協力によって運営され、日本文化全般にわたる現在の深い理解と広範な受容に貢献してきた。

(2) 1950年代に導入が始まり、1980年代以降、日系、非日系を問わず広く認知され制作されているスペイン語ハイクは、詩型では5・7・5音節を厳密に守り、詩学においては季語や切れ字の用法を探求する傾向が見られた。これらの特徴は、ハイクがスペイン語詩の新しいジャンルとして確立されつつある一方で、人と自然とのつながりを見直すという自然観、切れ字による「取り合せ」の詩学が受容されていることを示している。こうした事前調査の結果、詩型においても詩学においても日亜双方の文化が融合し、新しいアルゼンチン・ハイクという詩的ジャンルの生成を通じて現地の人々の間に価値観の変化が起こっていることを確信し、本研究課題の着想に至った。

## 2. 研究の目的

(1) 俳句を中心とする日本の詩歌が、アルゼンチンにおいてどのように受容され、現地化しているのか、そのプロセスを解明する。俳句は、19世紀末からのジャポニズムによってヨーロッパに導入され、アングロアメリカにはイマジズムを通じて、ラテンアメリカ(メキシコ)にはモデルニスモ運動をとおして紹介された。しかし、いずれの場合においても、俳句の影響は文学者や知識人たちの限られたグループ内に留まり、それ以上の発展を見せることはなかった。また、日系移民たちの俳句制作活動は日系社会内に留まり、現地の社会に広まる機会はなかった。一方アルゼンチンにおいては、スペイン語ハイクの制作が全国的な展開を見せ、民衆的な運動となっている。こうした独特な展開に着目し、現代アルゼンチン文化の特性を抒情詩の分野から明らかにすることをめざした。

(2) 俳句のアルゼンチン化のプロセスを通じて、アルゼンチンの人々の価値観にどのような変化が起こっているのかを調査する。この調査・分析によって、他のスペイン語圏諸国にも広がりつつある俳句の普及と発展を推進する要因を明らかにすることができ、より幅広い現象として捉えたスペイン語ハイク生成のメカニズムを、自然観や人生観といった価値観の変化という側面から解明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) アルゼンチンにおける現地調査を4回実施した。ブエノスアイレスの「西部俳句グループ」、「東西学院」、「日本大使館付属日本

文化情報センター」、「国立図書館」、「らぶらた報知」、「ラプラタの「ラプラタ・カトリック大学」において文献調査およびインタビューを行った。文献資料として、スペイン語ハイクに関する詩集、研究書、学会記録論集、コンクール作品集、新聞記事、展示会資料を収集し、詳細な読み込みと分析を行った。インタビューは以下の3種の内容について実施し、文字起しと分析を行った。

ハイク作家へのインタビューとして、日本の詩歌へのアクセス方法、ハイク制作開始の動機、ハイクの詩型と詩学について質問し回答を集めた。

「東西学院」と「西部俳句グループ」での句会に参加し、句会の運営方法とこれまでの活動について情報を収集した。

ハイク作家10人にアルゼンチン・ハイク6作品(全て同内容)の朗読を依頼し、音声資料を録音した。

(2) スペインにおける現地調査を2回実施した。マドリードの「アジア協会」、「国際交流基金」、「イペリオン書店」、「国立図書館」において文献調査および情報収集を行った。スペインにおいても近年日本文学関連の出版物および俳句関連の活動が増加し、アルゼンチンの活動と連携していることが確認できた。収集した文献・情報の分析を行った。

(3) 上記(1)で入手した音声資料のDuration分析を研究協力者の吉田夏也準教授に依頼し、データベースの構築を行った。これを用いてスペイン語ハイクと日本の俳句の韻律形式を比較し、スペイン語ハイクの音声的特徴を明らかにすることができた。

(4) ブエノスアイレスにおいて開催された「東西学院」主催「国際俳句学会」において2回の発表と意見交換を行い、論文執筆に向けて現地研究者から最新の情報を入手することができた。

## 4. 研究成果

(1) 日本の詩歌がアルゼンチンにおいてどのように受容され発展してきたか、またその受容のプロセスからどのようにアルゼンチン・ハイクの基盤が準備されてきたかを明らかにした。まず、日本人移民と日系人の文化活動の重要性に着目した。日本文学は日本人移民の普及活動によって1970年代終わりまでにアルゼンチン社会に広く知られるようになり、1980年代に入ると大学を中心に日本語・日本文化教育を行うセンターが設置される。1990年代にはアルゼンチンの民間文化機関やグループでハイクを中心とした日本の詩歌ジャンルの制作活動やコンクールが次々に始まり、日本政府機関もこれを積極的に推進した。2000年以降は徐々に非日系のアルゼンチン人たちに中心が移り、スペイン語による制作の段階ではほぼ完全にアルゼンチン人がその担い手となっている。

次に、アルゼンチン文学において短歌や俳句がどのように受容されたかを、アドルフ・オ・ビオイ・カサレスおよびホルヘ・ルイス・

ボルヘスの作品を中心に検証した。ピオイ・カサレスは 1956 年の短編集『幻想物語集』所収の「他者のしもべ」に自作のスペイン語ハイク作品を文化混淆性の象徴として用いた。ボルヘスは 1972 年の詩集『群虎黄金』中でスペイン語タンカを、1981 年の『命数』中でスペイン語ハイクの作品を発表し、スペイン語定型詩としてのタンカ、ハイクの定着に多大な影響を与えた。また、現地におけるスペイン語ハイクの詩学形成に重要な影響を及ぼした人物として久保田古丹(1906-96)の業績を分析した。久保田は崎原風子(1934-)とともに、現代俳句協会系結社の俳人として投句を続ける傍ら、俳句の現地化を目指してスペイン語ハイクの普及に尽力した。

このように、アルゼンチン文学作家と日本人移民の二つの分野の活動が合流し、現在のアルゼンチン・ハイクという混合性、雑種性を特徴とする新たな詩的ジャンルの基盤を形成したことを実証することができた。

(2) アルゼンチン・ハイクの季語の用法について、その特徴を分析した。まず、外国語ハイクにおいて日本の俳句の主要な要素の一つである季語が、どのように受容されて来たのかについて、その経緯を概観した。英語ハイクにおいてもフランス語ハイクにおいても、自然をうたう必要性は認めながらも、季語は必須のものではないとされてきた。しかし近年、ウィリアム・J・ヒギンソンの *Haiku World*『俳句・国際歳時記』(1996)出版や、ハルオ・シラネの「偉大な季節・地誌のアンソロジー」としての歳時記の評価など、季語に新たな注目が集まっている。こうした視点の変化は、日本の伝統詩歌研究が国際的にも進展していることを示しており、和歌、連歌、俳諧、俳句の流れの中で季語が位置づけられるようになったことと関連している。

そこで、アルゼンチン・ハイクにおける季語の用法について分析する前に、日本の俳諧の連歌と俳句の季語観の相違について整理し、両者の比較を行った。まず、俳諧の連歌において季語がどのように理解され、発句に用いられたのかについて、芭蕉のことに着目して検証し、季語をはじめ俳諧の語彙が変化の相のもとに用いられていることを確認した。次に、近代俳句における季語観の変化を取り上げ、無季容認派と有季定型のホトトギス派の両者について概観し、俳句制作が、作家個人の自由な表現と、伝統的な規制と捉えられた季語使用との間の緊張関係のうえに成り立ってきたこと示した。

その上で、アルゼンチン・ハイクの季語および通年の語の分類を行い、作品における機能を分析した。2000 年以降に出版された新しいハイク詩集の 1128 句を対象に、金子兜太他編『現代俳句歳時記』およびヒギンソン編 *Haiku World* で用いられた方法に基づいて、全体を「冬」「春」「夏」「秋」とそのいずれにも分類できない「通年」の 5 区分に分け、さらに各区分に「時候」「天文」「地理」「植物」

「動物」および「人々の生活」という項目を立てた。前句のうち自然の要素を含むパーセンテージは 87.5%であった。表 1.は、分類結果表の一部(「冬」「春」)である。

季節	項目	語数	例語		
冬	Clima 時候	16	congelar	frio polar	noche helada
			凍る	南極の寒さ	凍てる夜
	Astronomía 天文	12	bruma	escarcha	sudestada
			冬霧	霜	南東風
	Geografía 地理	3	campo	jardín de	
			nevado	agosto	
	Plantas 植物	5	camelia	rama	desnuda
			椿	裸の枝	
Animales 動物	3	cisne	ballenato		
Vida humana 人々の生活	6	mejillas	radiador		
		frias	冷たい頬	ヒーター	
	計	45			
春	Clima 時候	6	octubre	noviembre	primavera
			10月	11月	春
	Astronomía 天文	2	lluvia de primavera	viento primaveral	
			春の雨	春風	
	Geografía 地理	1	pradera verde		
			緑の牧場		
	Plantas 植物	23	pimpollo	trébol	jacarandá
蕾、木の芽			クローバ	アカランダ	
Animales 動物	9	golondrina	mariposa	rana	
Vida humana 人々の生活	0				

	活				
	計	41			

表1. アルゼンチン・ハイクのトピック(季語・通年の語)分類表

以上のようなトピックの分類作業を行い、例句におけるその機能を分析した。一定の季節を指示する季語は21%にすぎないが、いずれも地域特有の自然や文化的特徴を備えた事物であり、読者に季節の変化を実感させる語となっている。一方、79%を占める通年のトピックの多くは時候、天象、地理、植物、動物などの身近な自然の事物であり、そうでない場合も、物質、人間、生活・社会、文化・宗教など、共通の文化的記憶を作品の中に呼び込む機能を果たしている。また、それらのトピックは、居住する地域の日常生活に深く関わる語であり、それゆえに絶え間なく変化する要素であった。

こうした分析結果を日本における季語観と比較すると、アルゼンチン・ハイクにおける季語および通年のトピックの用法は、近代俳句における季語ではなく、事象の変化に着目する俳諧の季語のそれに近いことが明らかになった。つまり、現在のアルゼンチン・ハイクの詩学は、西欧詩がロマン主義と前衛派によって詩的言語の変革を経験した際に受容した、日本の俳諧の連歌の季語観に連なっていることが検証できた。

(3) スペイン語ハイクの音声的特徴を、スペイン語詩法と日本語俳句の韻律の比較から明らかにした。まず、スペイン語の韻律法においてハイクという詩型がどのように受容されているのか、ジャンルの特色、詩行のリズム構成および詩連の構造等の視点から調査した。同時に、伝統的な韻律システムにおける類似の詩型の存在にも着目し、そのハイクとの関連も考慮した。

次に、日本語俳句の韻律について行なわれている現在までの議論を概観し、俳句の可能なリズム構成とその特徴を提示した。主要な説は以下の二つである。

上句と下句の後に長い切れ(休止)をとめない、ゆっくりと唱えられる場合を想定した七五調(四拍子)

緩やかな二拍単位(タン)と急な三拍単位(タタタ)の組み合わせのパターンが中心となって俳句のリズムを決定する混成リズム  
実際に声に出してみると、は和歌のような朗詠、はより日常的な口誦の場合と考えるのが自然に思われる。俳句は現在、朗詠、朗読、口誦、囁きなど、多様な唱え方をされる詩型であり、どんな状況で声に出されるかによってその韻律が選ばれていると考えられる。

以上二つの韻律法と比較するため、別々の作家によるスペイン語ハイク作品6句を対象として、まずスペイン語韻律法によるテキスト分析を行った。表2.はその結果の一部(2句分)である。

テキスト(出典)	詩行リズム構成	詩行ごとの和訳
A		
De una en una,	óoo óo (dactílico)	一粒ずつ
el gorrión bebe gotas	oo óoo óo (dactílico)	雀は露を飲む
del alambrado. (Mendiara 1998)	ooo óo (trocaico)	鉄条網の
D		
Oro y tristeza,	óoo óo (dactílico)	黄金と悲しみ
atardecer de otoño. -----	ooo óo óo (trocaico)	秋の暮
Puente sin pasos. (Ramos 2000)	óoo óo (dactílico)	行く人のない橋

表2. スペイン語韻律法によるテキストのリズム構成分析

この分析結果から、アルゼンチンの詩人たちはハイク制作にあたって、スペイン語の韻律的音節に合致したハイク定型を作りつつ、5音節行、7音節行の強弱格、強弱弱格という2種類のリズム単位を作品の展開に沿って組み合わせていることが分かった。そこには、5-7-5音節の枠内に音節融合や分立を駆使して全体をおさめ、詩行のリズムによって「切れ」やイメージの変化を強調するという、スペイン語定型詩としてのハイク制作プロセスを見て取ることができる。つまり、アルゼンチンの詩人たちは、ハイク作品を創作する過程では、一篇のスペイン語詩を書いているのである。そこには、口承の民衆詩としてよく知られているセギディリヤの韻律も影響を及ぼしているに違いない。

続いて録音資料の音声分析から音の継続、ポーズのパターンを調べた。制作や発表の現場において、どのように朗読され、あるいは口ずさまれているのかを調査するため、アルゼンチンの10人の詩人たちに上記と同じ6作品のテキスト朗読を依頼し、その録音資料に基づいて、音声学の専門家にDuration分析とデータベース作成を依頼し、その結果を積み上げ面グラフで表した。グラフは10名の朗読者のデータを積み上げて、全体の傾向が読みとりやすい形式とした。グラフは容量が大きいためここに提示できないが、6作品全ての結果で共通している点は、各行末のポーズ(end)で3分割された17音節が、2音節または3音節のまとまりを中心として構成されていることであった。2音節(長短)、3音節(長長短または同長の3連続)が、スペイン語韻律法の強弱アクセントとは合致しない別のリズムの波を形成していることが明確に見取れた。各作品の構成を、2音節の山を「2」、3音節の山を「3」として以下に示す。また、例外となる4音節および5音節の山「4」、「5」の韻律形成は母音一音の音節を含む場合であ

るが、日本語俳句の母音一音で構成されるモ  
ーラを含む場合と重なる現象であった。

A (4 1)(2 2 2 1)(2 3)

B (3 2)(3 2 2 1)(2 3)

C (2 2 1)(3 2 1)(5)

D (5)(1 2 2 2)(2 2 1)

E (2 2 1)(3 2 2)(2 2 1)

F (2 3)(3 2 2)(4 1)

このように、完成された作品を朗読、口誦する段階では、日本の俳句の持つ短詩型特有の韻律との共通点が現れてくる。日本の俳句の場合と同様に、スペイン語ハイクはわずか17音節で完結するので、長編詩のように前後の文脈から語句の意味を推測することができない。そのため、作品の意味内容が聞き取りやすいように、2音または3音の単位を中心に音の長短の山を形成しつつ口誦する形式が選択されたことは自然に思われる。俳句の混合拍子説と同様、2音節の単位が基礎となり、それに3音節語を中心とする3音節の単位が加わり、さらに4音節や5音節の特殊な単位がアクセントを付けながら、リズムのバリエーションが展開されているのである。スペイン語ハイクは、この朗読法を用いて、通常1作品につき2回ずつ読まれる。この点も日本の句会での読まれ方と共通する。

スペイン語ハイクの韻律形成には、以上の点に加えて、アルゼンチンにおける日本の俳句受容のプロセスも影響を及ぼしていると考えられる。ブエノスアイレス地域では、日本人移民や日系人の文化活動として盛んに日本語の短歌、俳句、川柳が作られたのみならず、非日系のアルゼンチン人へのスペイン語ハイク普及活動が日本人移民によって意欲的に進められた。日本国内の俳句誌にも投稿を続けていた日本人の俳句作家達によって、直接の移植が行われ、現在のスペイン語ハイク作家たちの多くは彼らの指導を受けたのである。ハイク制作指導には、芭蕉以降の日本の俳句作品の紹介や解説が多数含まれており、日本語での朗読もしばしば行われた。このような過程の中でスペイン語ハイクは、日本の俳句のテーマや形式とともに、音読の際の韻律上の特徴も受容し、作品の朗読形式を確立したと思われる。その結果、アルゼンチン・ハイクは、スペイン語韻律法で書かれたテキストと、日本の俳句に通ずる口誦形式を併せ持った複合的な韻律を獲得したのである。

(4) 俳句の普及がアルゼンチン社会にもたらした価値観の変化について、二つの視点からその原因を探った。まず、俳句の定型の持つ機能に着目した。俳句は西欧のリアリズムと個人主義中心の文学観の影響下に、俳諧連歌から切り離された発句として出発したが、その創作方法はアルゼンチンで実践されている「句会」の存在に明らかのように、共同体的であり、参加型であり続けた。また詩歌にはもともと、即興的なパフォーマンスとしての側面と推敲されたテキストとしての側面が存在するが、俳句は短詩型文学としての利点

から、パフォーマンスとして享受できる詩型として普及した。小学生から高齢者まで、さまざまな立場の人々が制作し、享受することができるジャンルは現代詩の概念を変化させ、生活の中で詩を作り、味わう喜びを提供したのである。一方、パフォーマンスとしての機能はそれが作られたコンテキストに依存する部分が多いために、テキストとして鑑賞するには困難が生ずることが多い。国内外で俳句・ハイクの質の問題が問われる理由はここにある。しかし、歴史的にコンテキストを補うために添えられてきた詞書、散文との組み合わせ、グラフィックなものとの組み合わせもまたアルゼンチンやスペインで普及しつつあり、各地のハイク雑誌やハイク・サイトには俳文、俳画、俳句日記などが掲載されている。また、ハイクの普及には、個人主義だけではなく、「文学」や「芸術」における作者/読者 観の変化が関わっていると思われる。

第二に、環境史における変動と自然観の変容について論じた。連歌、俳諧連歌の生成は、いずれも日本列島の環境史において「古代の略奪」「近世の略奪」と呼ばれた時期に一致し、俳句・ハイクの成立と普及は国内外における近代産業社会の形成に呼応するように進展している。従来の自然と人間のかかわりが破綻をきたしたとき、人々の自然観にも揺らぎが生じる。支配的であった優美な和歌言語の体系は俗語による模倣やパロディを取りこんで変容し、都市や里山の生態系を取り入れて組み直された自然観を表象する俳諧言語となる。そして産業革命後、長期的持続性を維持していた自然と人の関わりは大きな変動を被り、この破綻を乗り越えるためには、人間を環境や生態系の支配者ではなく構成員と捉えるべきであるとする自然観が広がっていく。日本では「民間の自然観」を歳時記に反映した俳句が生成し、欧米では環境思想やエコロジーとハイク制作がリンクして発展した。今日アルゼンチンでは、都市部においても地方においても環境問題が深刻化し、南部パタゴニアや北部熱帯地域イグアスでも極端な気候変動が生じて生物多様性の減少に対して危惧が広がっている。アルゼンチン・ハイクには「人と自然との関わりを対象とした短詩」というジャンルが育む、環境思想への深い関心が共有されているのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

井尻 香代子、俳句の普及による価値観の変化、京都産業大学論集、査読有、第47号、2014、87-102

井尻 香代子、スペイン語ハイクの韻律：アルゼンチン・ハイクの音声分析から、京都産業大学論集、査読有、第46号、2013、265-280

<http://hdl.handle.net/10965/910>

井尻 香代子、国際ハイクと季語：アルゼンチン・ハイクをめぐって、京都産業大学論集、査読有、第45号、2012、315 - 331

<http://hdl.handle.net/10965/774>

井尻 香代子、アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容について、京都産業大学論集、査読有、第44号、2011、22 - 37

<http://hdl.handle.net/10965/376>

〔学会発表〕(計 3 件)

井尻 香代子、スペイン語ハイクの韻律とはどのようなものか、国際俳句学会第7回大会、2012年10月26日、アルゼンチン社会科学大学

井尻 香代子、3人の作家たち アルゼンチンにおける俳句導入をめぐって、国際俳句学会第6回大会、2010年10月22日、アルゼンチン社会科学大学

井尻 香代子、アルゼンチンにおけるスペイン語ハイク生成について、日本ラテンアメリカ学会、2010年6月5日、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井尻 香代子 (IJIRI, Kayoko)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：70232353

(2) 研究分担者

木村 榮一 (KIMURA, Eiichi)

神戸市外国語大学・外国学研究所・教授

研究者番号：80073344

(3) 研究協力者

吉田 夏也 (YOSHIDA, Natsuya)

北海道文教大学・外国語学部・準教授

研究者番号：60316320